〔書　評〕

# 高瀬敦子著『英語多読・多聴指導マニュアル』

（大修館書店　2010年６月刊）

吉　田　弘　子

本書は，2010年度の日本多読学会会長であり，自らも多読授業を高等学校及び大学で長年にわたり実践してこられた高瀬敦子氏の執筆によるものである。英語学習における多読の効果に関心はあるものの，実際にどのように授業で導入すればよいか，何を準備すればよいのかなどの理由で多読の導入に踏み切れない英語教師は少なくないであろう。かくいう評者も本学に多読学習を導入する際には，（本誌第61巻第２号『英語学習における多読の効果―授業に多読活動を導入するために』参照）全くの手探りの状態から始め，高瀬氏の学術論文やご本人にお目にかかった際に質問攻めにしてご教示いただいた経験があり，当時に本書が出版されていればどれほど心強かっただろうと痛感する。本書はまさに待望の多読指導本であるといえる。

多読とは，学習者が自ら選択した興味のある易しい英語の本を大量に読むこと（Bamford & Day, 1997）をいい，Krashen が唱えた「学習者が理解できるレベルの大量の言語にふれることで言語習得は可能になる」というインプット仮説（input hypothesis）に基づく英語教授法のひとつである。英語学習における多読の効果は，学習者のやる気を高める（Mason & Krashen, 1997; Takase, 2007），また TOEFL/TOEIC テストの準備として有効である（Nishizawa, Yoshioka, & Ito, 2006; Takase 2007）などが報告されている。中でも，豊田工業高等専門学校では全学的な多読プログラムを導入し，100万語以上を読んだ学生が英語力を大いに向上させたという研究結果を報告している（Nishizawa et al., 2006）。しかし，多読を英語授業に導入するには，大量のグレイディッド・リーダー（graded readers），つまり学習者向けに文法や語彙が統制された教材が必要であり，その購入や管理方法をどのようにするかという課題，また，既存の英語カリキュラムとの整合性や授業での評価方法などの検討が不可欠である。また，英語のリーディングで一字一句を訳する「訳読」なくして英文を理解したかどうかを確認することはできるのか，という英語教授法としての多読に懐疑的な批判も絶えず存在する。本書はこれらの多読指導に関する疑問・質問に対して，著者の13年にわたる経験及び全国各地で実施されている多読・多聴授業の実践報告，さらに国内外の研究結果も併せて紹介し，多読を授業で導入・指導する際の心強いガイドとなるであろう。

本書の構成は以下のようになっている。

第１章　多読・多聴とは

第２章　多読・多聴の効果
第３章　多読・多聴指導の三大ポイント
第４章　多読・多聴導入方法
第５章　多読・多聴用教材
第６章　うまくいかない多読・多聴指導―原因とその対処法
第７章　成功した多読
第８章　多読の評価
第９章　多読・多聴にプラスするアウトプットの必要性
第10章　多読・多聴指導 FAQ
〈付録〉
参考文献
多読・多聴指導実施校一覧
索引

第１章では，多読・多聴授業の目的について「英語運用力の向上をめざすこと」,「英語嫌い・英語アレルギーを減らす」,「本の楽しみを経験させ，読書の習慣をつける」の３点が挙げられている。また，外国語学習法としての多読の考えが近年に起こったものではなく，夏目漱石が「現代読書法（1906)」ですでに言及しており（川島，2000)，多読が古くから経験則として英語学習者によって実践されていたことが示唆されているのは興味深い。ここに漱石の一節を紹介する。

> 英語を修むる青年は或る程度まで修めたら辞書を引かないで無茶苦茶に英書を沢山(たんと)と読むがよい。少し解らない節があっても其処は飛ばして読んで往つてもドシドシと読書して往くと終には解るようになる（中略）要するに英語を学ぶものは日本人がちやうど国語を学ぶやうな状態に自然的慣習によつてやるがよい。

筆者はさらに多読が現在の英語教育に必要な理由として，現代の日本における英語教育の現状を挙げている。英語教育で依然主流である「訳読」は，英語を読むのではなく暗号解読に等しく,「英語で読む」という訓練がほとんど行われていないこと，文法をいかに教わり，大量の文法問題を解く練習を行っても，それを運用するところまで行わなければ決して外国語は習得できないと指摘する。また，一般的に中高６年間の平均的教科書で使用される語彙数は３～５万語であるが，この量では英語習得を目指すには全く不十分であり，授業で多読指導を取り入れる重要性を主張する。しかし同時に，授業で単に「英文を多く読むこと」という方針を示すだけでは，多読の効用は発揮されにくいと注意も喚起している。筆者の経験によると，高校生・大学生はともすれば語数の多い難しい本を選びがちになり，その結果多読の楽しさを味わう前に，途中で挫折してしまうことも多いという。これに対処するには，著者は多読初期においては，教員が教材の選択に積極的にかかわり，

やさしい本をまず100冊読ませることが有効であるとしている。

第2章では多読が英語学習における情意面（やる気，自信など）でいかに効果的であり，また，大学入試，英検，TOEIC/TOEFL などの各種試験や英語力全般に関する効果をもたらすことができるのかを研究と具体例を挙げて紹介されている。さらに，多読が読書の習慣づけ，集中力持続時間増加，学習意欲向上，外国文化・生活習慣に対する理解などにも有効であるという例が挙げられている。また多読の実証研究ほど数多くはないが，多聴は多読と併用することにより，リスニング力の向上のみだけではなく多読の効果をも高めることが報告されている。

第3章では多読指導を実践する際の留意点が具体的に示されている。多読指導では，授業内読書（Sustained Silent Reading）を取り入れること，やさしい話から始めること（Start with Simple Stories），そして最小の読書後課題（Short Subsequent Tasks）の3つがポイントであると筆者は指摘する。また，多聴指導においても，授業内多聴（Sustained Individual Listening），聴きとりやすい話から始める（Start with Simple Stories），多読と同時導入（Start with Extensive Reading）することの大切さを訴えている。授業内読書の利点としては，学習者の読書時間を確保できること，指導者が学習者の読書状況を観察できること，学習者の集中力を養うことができることの3点が挙げられている。やさしい本から始める理由は，平易な英語で書かれた本を読むことで，学習者に「これなら読める」という自信をつけさせ，やる気を起こさせるという目的がある。本のレベルについては第5章で細かく紹介されているが，「英語を日本語に訳さないで楽に読める本または絵本」をまず選択させることの重要性を筆者は自らの経験及び研究に基づいて説いている。また，やさしい英語を大量に読むことは，やさしい語彙や表現に繰り返し何度も出会うことであり，それによって，基礎を固め英語力向上につながるとデータを引用しながら示している。

第4章では，多読・多聴を導入する際に生じる様々な問題点とその解決策が提示されている。教員が多読導入を躊躇する一因には「授業に多読を導入する時間的余裕がない」という理由が挙げられることが多い。また，昨今大学の英語教育プログラムでも一定のカリキュラムの下，授業の進度やテストも統一されている場合が増え，その中で多読を導入することが成績に影響する懸念を抱く指導者も多いが，本章では授業内読書を導入する場合の時間数や実施場所，クラスサイズについて実情に応じて参考にできるように様々なパターンが紹介されている。ここで筆者が強調しているのは指導者の役割である。「多読は学習者に勝手に本を読ませるだけだから楽である」という誤った認識では多読の効果は望むべくもないと評者も書いたが（吉田，2010, p. 140），指導者は授業内多読時に学習者の読書状況を観察し，本人のレベルにあった本を読むように根気よく指導を続けることが大切である。また，多読記録を細かく読み適宜コメントなどのフィードバックを行うことの重要性も指摘されている。

第5章では実際に使用される多読・多聴用図書が紹介されている。現在英語学習者用の多読用図書は様々な出版社から出版されているが，出版社によって本の難易度レベルの基準が異なるのが実情である。これに対処するために，日本多読学会などでは日本人学習者

向けに設定された統一した難易度の基準 YL（Yomiyasusa Level）を用いている。英文の難易度を表すには文章の平均的長さや各単語の平均的な音節数をもとに算出する Flesch 式（FRE）や Flesch-Kincaid 式が知られているが，YL は，語彙，文法，文の長さ，字の大きさ，文化的背景などを考慮に入れて決定されており，多読図書選定にあたっては YL を参考にすることにより，出版社が異なる場合でも学習者の英語レベルにあった図書を選ぶことができる。本章では，実際に何冊かの多読用図書が写真入りで紹介されている[1)]。多読図書になじみのない場合は「(このように絵の多い) 易しい本を読んで果たして効果があるだろうか」と疑問に思うかもしれないが,「簡単に理解できる本を大量に読む」のが多読であることを念頭に置いて本章を読んでいただきたい。図書の導入に迷った際はこの章に記述されている図書をまず第一候補として考えることが合理的であろう。出版社による英文の難易度表示は通常，語数や語彙の頻度など，英文の要素で決定されるが，筆者は指導経験上から，なじみのない英語の登場人物の名前が話の理解を妨げる一要素になることを指摘し，シリーズを通して同じ登場人物が活躍する Oxford Reading Tree（ORT), Longman Literacy Land Story Street（LLL-SS), Foundations Reading Library（FRL）などが高い人気を得ている一因であると分析している。さらに第５章では，多読読書の進め方，読書記録の付け方，多読図書の入手方法及び管理についても言及している。多読は，学習者自身に本を選択させることが基本であり，そのためにはより多くの種類（レベル，ジャンル等）の本を準備することが必要である。また，学習者が多数に及ぶ場合は，同じ本が複数冊必要になってくる場合もある。多読指導を授業に取り入れるにはこれらの多読用図書の適切な管理が不可欠であり，そのために図書館や関連部署に購入依頼を行うためのヒントが筆者の経験に基づいて述べられている。

第６章では多読・多聴指導を導入したが「学習者が本を読まない」，あるいは「学力が伸びない」など指導がうまくいかない場合の原因とその対処法が提示されている。また，多読導入時に「授業をせずに本を読ませているだけ」など予想される周囲の反発とその対処法についても触れ，多読を実施した際にアンケートを行うなどしてデータを積み重ね，多読が英語指導法として有益であるという実証的データを積み重ねることで周りの理解を得ることの大切さを筆者は説く。また，管理職や組織のサポートを得る地道な努力を継続して実施することの重要性など実用的なアドバイスが展開されている。

第７章では，多読を導入し，大きな成果を収めている６つの学校・グループ（武庫川女子大学附属中学校・高等学校，鷗友学園女子中学高等学校，広島市立己斐中学校，国立豊田工業高等専門学校，近畿大学法学部，SEG（Scientific Education Group)）の例が紹介されている。これらの学校・グループで共通していることとして，指導者自身が多読実践者であり，その必要性と効果を認識していること，長期間多読・多聴を実践していること

1）紙幅の都合で，すべての本が図入りで紹介されているわけではない。多読図書に関しては多くのシリーズが略語を用いられて語られることが多く，実物の図書を見ずに理解するのは難しい点があるかもしれない。「読書記録手帳（古川，2008)」の後半に収録されている多読図書リストには出版社別に図書の YL が紹介されているので併せて参考にされることを評者は推奨したい。

（近畿大学法学部を除く），授業中の多読時間が長い，年間の多読時間が多い，多読・多聴用図書が充実している，指導者の裁量で多読指導を用いたカリキュラムを組んでいる，多読の成果を外部テストで検証しているなどが挙げられている。

第８章では，多読の評価を「学習者に対する評価」，「指導者に対する評価」，「プログラム全体の評価」の３点から検討している。多読をどのように学習者の成績に反映させるかは，授業形態や学習環境，指導者の方針によって異なるが例えば出席点，サマリー提出，プレゼンテーション，読書量（語数），内容理解テスト，一斉学期末テスト，外部テストなどが挙げられている。多読は本来，楽しみながら読むことが最優先されるべきで評価のために読むことは避けられるべきだが，評価が学習者の動機づけになる場合もあり学習者に適した評価をいくつか組み合わせて成績に反映させることが大切であると筆者は説く。指導者に対する評価は，まず第一段階としてクラスの学習者が多読・多聴授業に自ら積極的に取り組んでいること，そしてその次に英語力の伸びがみられたか，目標とするレベルの多読図書を読めるようになったかどうかを検証することであると論じている。プログラム全体の評価では，上記の学習者の積極的な多読・多聴への参加のほかに，同僚の教師が多読・多聴指導に興味を持つようになったのか，なども考慮に入れることの大切さを筆者は主張する。第７章でもふれられているが，多読の成果は長期間実践した場合により認められやすくなるが，通常中学・高校や大学ではカリキュラムの関係でクラス替えや教師の担当クラスの変更があり，この中で多読指導を継続させるためにはより多くの教師が多読に理解を示し，学校単位あるいは学年単位で多読を導入することが望ましいからである。

第９章では，英語力向上に有益な多読・多聴指導に加えて，流暢さと正確さを伴う運用能力を習得するために，プラスアルファとしてアウトプットの機会を導入することを忘れてはならないと筆者は論じる。大量のインプット（reading・listening）と大量のアウトプット（speaking・writing）が両輪となり初めて英語運用能力向上につながるからである。

第10章ではこれまでのまとめとして，多読・多聴に関する様々な質問，疑問に答える形式となっている。

以上が本書の全体像であるが，「マニュアル」とタイトルにあるように多読・多聴指導の基本がこの本１冊を読めば理解できる。また，多読・多聴を導入したけれども，指導に迷いが生じた際にも具体的な解決策が得られる極めて優秀な本であるといえる。しかし，本書は単にマニュアル本にとどまらない。多くの研究結果が紹介され，参考文献も充実しており，多読・多聴を研究したいと思う者にとっても最適な入門書であるといえる。さらに，巻末には多読・多聴指導実施校一覧が記載されており，授業見学ができるクラスも紹介されている。本書で授業内読書（SSR）において学習者が水を打ったように静かになり一斉に読書に取り組む様子は“one of the most beautiful silences on earth（Henry, 1995）”と描写されているが，これに誇張がないことは授業を実際に見学することで初めて理解できるだろう。また，本書には，多読・多聴指導の際の多数のエピソードがコラム形式で紹介されている。英語の指導の成果は，ともすれば TOEIC などの外部テストのスコアのみで英語運用能力が上がったかどうかが論じられることが多いが，これらのエピソードには

学習者一人ひとりの多読・多聴の参加の様子が生き生きと伝えられていている。筆者も述べるように，多読・多聴指導がいかに現在の日本の英語教育の欠点を補う優れた指導方法であったとしても，100％の学習者に同じような成果をもたらすものではない。しかし，辞書を引いても使用するテキストの意味がわからず授業に全くついていくことができなかったスポーツ推薦で入学したある大学生が，筆者の個人指導でやさしい絵本200～300冊を１学期かけて読んだのちに，テキストが理解できるようになり自力で単位を取得するにいたったというエピソード（p. 71-72）は，多読がもたらす効果を表すものとして好例であろう。多読・多聴指導の最大の利点は，それまでの英語学習歴がどのようなものであっても，英語力を身につけることが可能であるという点である。本書の刊行により，多読・多聴指導への理解が英語教員や学校関係者にさらに広まることを期待したい。

## 参　考　文　献

Bamford, J., & Day, R. (1997). Extensive Reading: what is it? why bother? *The Language Teacher, 21,* 6-8, 11-17.

Henry, J. (1995). *If not now: developmental readers in the college classroom.* NH: Boynton/Cook Publishers, Heinemann

Mason, B., & Krashen, S. (1997). Can extensive reading help unmotivated students of EFL improve? *ITL Review of Applied Linguistics,* 117-119.

Nishizawa, H., Yoshioka, T., & Ito, K. (2006). Eibun tadokuniyoru kougakukeigakuseino eigounyounouryokukaizen [Improvement of engineering students' communication skills in English through extensive reading]. *IEEJ, 126*, 556-562.

Takase, A. (2007). Extensive reading in the Japanese high school setting. *The Language Teacher, 31,* 7-10.

川島幸希．(2000)．『英語教師　夏目漱石』．東京：新潮社．

古川昭夫．(2008)．『読書記録手帳』．東京：コスモピア．

吉田弘子．(2010)．「英語学習における多読の効果」．『大阪経大論集』，第61号，133-143．